

## 中間評価結果（公表様式）

75

大学名	京都大学
研究施設名	東南アジア地域研究研究所
拠点の名称	地域情報資源の共有化と相関型地域研究の推進拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

施設の設置目的に沿って、情報学を応用した地域情報学の構築、地域に関する学術情報資源の共有化、地域横断的な相関型地域研究の推進の3つのミッションを推進する。そのため、地域横断的な研究課題並びに地域研究情報資源の全国的な共有化や次世代育成に関わる共同研究を、全国の地域研究関連組織や研究者コミュニティに開かれた体制のもとに実施する。

#### 【取組内容・期待される効果】

サイバー時代のビッグデータに対応した次世代地域研究情報基盤を構築し、共同利用に供するとともに、相関型地域研究への適用を目指した共同研究を展開する。情報及び情報技術を駆使した地域研究の展開は、国家の存立を資源輸入と貿易に依存するわが国が安定成長を持続する上で、世界動向の正確な理解に基づく的確な政策立案に貢献する。また、21世紀のパートナーたりうる東南アジア及びアメリカ大陸諸国とわが国の間に有機的かつ効率的なネットワークを構築する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

B：拠点としての活動は行われているものの拠点の規模等と比較して低調であり、作業部会からの助言や関連コミュニティからの意見等を踏まえた適切な取組が必要と判断される。

#### （評価コメント）

地域研究に係る写真資料等のデータを共同利用に供し、情報技術を駆使した地域研究を展開している。ビッグデータへの対応に着手し、地域研究情報基盤の再構築を目指しているが、同一の研究施設における東南アジア地域研究の拠点との機能分化は明らかとは言えない。

今後、共同利用・共同研究拠点として進むべき方向性を明らかにし、運営の体制を見直すことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 東南アジア関係の図書・マイクロ資料等を多数所蔵しており、地域研究に関するデータベースを公開して共同利用に供しているが、データベースの利用頻度は調書からは明らかでない。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募は公平な審査が実施されているが、地域研究に関する情報の整理や発信など方法論に焦点を当てた共同利用・共同研究は活発ではない。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) ビッグデータやクラウド環境に適応した特色ある地域研究情報基盤の再構築に着手している。情報の分析・整理・発信・アクセス状況といった拠点に期待される活動状況の更なる可視化が望まれる。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 地域研究に関する複数の共同利用・共同研究拠点との連携が認められ、今後、情報学の観点からの支援が期待される。
⑤審査（期末）評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 一つの研究施設に二つの共同利用・共同研究拠点があり、両者の関係等は不明確である。また、若手研究者の育成や人材流動性を高めるなどにより、当該研究分野への貢献が期待される。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 海外からフェローシップを受け入れるなど、国際公募を行い積極的に海外からの研究者を受け入れている。また、博士課程学生の教育面でも貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 東南アジア地域に関する研究に加え、それ以外の地域研究、地域を超えたグローバルな現象に関する研究、地域間比較の研究、デジタルデータ一般の問題に関する研究など、推進する方向が分散しているように見受けられる。一研究施設に二つの共同利用・共同研究拠点がある状況については、方向性の明確化が望まれる。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究拠点としての方向性を明確化し、中核的な共同利用・共同研究を可視化して推進するとともに、先端的な研究によって共同利用・共同研究拠点の機能を高めることが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

76

大学名	京都大学
研究施設名	東南アジア地域研究研究所
拠点の名称	東南アジア研究の国際共同研究拠点
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

東南アジアにおける自然環境と調和する持続的発展と多文明・多民族共生の実現にむけた地球共生パラダイムの構築は、人類生存のための喫緊課題である。本拠点の目的は、東南アジア研究の国際共同研究拠点を形成し、国際的な研究ネットワークを活用して、地球共生パラダイムの構築を目指す先進的な文理融合型の共同研究・共同利用を推進することである。

#### 【取組内容・期待される効果】

学際的研究における共同利用・共同研究のモデルになるとともに、国内外の東南アジア研究コミュニティの人材の流動性を高め、質の高い研究成果を世界に発信する。東南アジアの諸機関との協働・協力により、本学の戦略である「独創的な先端研究・融合研究の推進による学術・社会のイノベーション創出」を推進することにより、研究成果の社会還元や社会連携活動を担う人材の育成に寄与する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

東南アジア研究関連の複数の優れた研究者が在籍し、外部資金を得て、東南アジア地域研究に関する国際的な共同利用・共同研究拠点としての機能を果たし、着実に研究成果を上げている。

一研究施設に二つの共同利用・共同研究拠点があることについて、今後、共同利用・共同研究拠点として進むべき方向性を明確にし、運営の体制を見直すことが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 受賞状況等から、卓越した研究者が在籍し、組織としての厚みを持っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 共同利用・共同研究の公募を全て国際公募とし、出版についても国際公募とするなど、共同利用・共同研究拠点としての国際性が高い。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 論文発表数が非常に多く、インパクトファクターの高い学術誌にも発表されている。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) 国内の地域研究に関する共同利用・共同研究拠点のうち異分野融合を謳っている唯一の拠点であり、学際研究のモデルを提示することによって広く関連研究者コミュニティに貢献している。
⑤審査(期末)評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 学外の大学院生を含めた若手研究者の育成に積極的に取り組んでいる。
【以下、該当する拠点のみ】
⑥期末評価結果のフォローアップとして、各国立大学の強み・特色としての機能強化への貢献
(評価コメント) 国際化や博士課程学生の教育等の面で大学の機能強化へ貢献している。
⑦拠点としての今後の方向性
(評価コメント) 一研究施設に二つの共同利用・共同研究拠点があり、共同利用・共同研究拠点として進むべき方向性を明確にすることが望まれる。
⑧組織再編に伴う拠点活動の状況
(評価コメント) 組織再編により、東南アジア地域研究以外の研究の位置付けと拠点活動との関係は不明確となっている。今後、拠点として進むべき方向性を明確にし、運営体制を見直すことが望まれる。

## 中間評価結果（公表様式）

77

拠点の名称	生体医歯工学共同研究拠点（ネットワーク型）
大学名 （研究施設名）	東京医科歯科大学（生体材料工学研究所）【中核機関】 東京工業大学（科学技術創成研究院未来産業技術研究所） 静岡大学（電子工学研究所） 広島大学（ナノデバイス・バイオ融合科学研究所）
認定期間	平成28年4月1日～平成34年3月31日

### 1. 拠点の目的・概要

#### 【目的・意義・必要性】

4つの研究所がネットワークを形成して研究所の機能を融合し、研究者コミュニティの異分野融合研究をサポートして生体材料、再生医療、医療用デバイス、医療システムなどの実用化を促進することを目的とする。

#### 【取組内容・期待される効果】

中核機関である東京医科歯科大学の医学部、歯学部、それぞれの附属病院、医療イノベーション推進センター等と緊密に連携して異分野融合共同研究を推進し、生体材料、医療システムの実用化を図る。新しい学術領域である生体医歯工学分野の知見を深め、若手研究者を育成するとともに、異分野融合領域における研究、産業の国際競争力向上に寄与する。

### 2. 総合評価

#### （評価区分）

A：拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される。

#### （評価コメント）

共同利用・共同研究が活発であり、多くの論文が発表されている。また、四つの研究所が共同して、若手研究者育成のための技術実習・講習会などを開催している。これまで医学系研究分野との関係が深かった中核機関が、工学系研究分野の他の大学と医学系組織との連携促進に貢献することで、ネットワーク型拠点としての機能を果たしている。

今後、拠点外の利用者の受入増加など、ネットワーク型拠点としての活動を拡大するための方策を検討することが望まれる。

### 3. 観点毎の評価

①拠点としての適格性
(評価コメント) 四つの研究所が連携して事業を推進している。手術用ロボットの開発や乳がん検査装置の臨床試験など、医工連携を目指したネットワーク型拠点としての成果が出始めている。また、実務担当者や技術職員による支援体制が整っている。
②拠点としての活動状況
(評価コメント) 多数の共同利用・共同研究を実施するとともに、四つの研究所が共同で若手研究者育成のための技術実習・講習会などを開催している。
③拠点における研究活動の成果
(評価コメント) 工学系を中心に多数の論文を発表している。また、国際シンポジウムなども開催している。
④関連研究分野及び関連研究者コミュニティの発展への貢献
(評価コメント) シンポジウムの開催や共同利用・共同研究の実施、学会活動により、関連研究者コミュニティへの貢献が一定程度見受けられる。
⑤審査（期末）評価結果のフォローアップ状況
(評価コメント) 研究所間のコーディネート強化するための特任教授の採用、クロスアポイントメントによる研究者の採用など、審査評価結果の対応に努めている。